みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

災害過程の研究と被災地支援：コメント1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 正幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001392

第2部　災害過程の研究と被災地支援

― コメントと総合討論 ―

司会:午前中からの報告全体について，お二人のコメンテーターをお願いしてあります。最初に渡辺さん，次に高桑さんからコメントをいただいた後，論点を整理した上で，全体での討論に移っていきたいと考えます。

それでは，さっそく渡辺さん，お願いいたします。

コメント1

渡辺　正幸
国際社会開発協力研究所

ありがとうございます。渡辺と申します。もとJICAの国際協力専門員をやっておりました。その後JICAをやめまして，今は（有）国際社会開発協力研究所という小さな会社をやっております。

今日は，たくさん興味の尽きない話を聞かせていただきました。私の乏しい知識ではありますけれども，私自身の経験を織り交ぜて感想を申し述べさせていただきたいと思います。何が出てくるかわかりませんでしたので，どういう視点からコメントを差し上げるかということをまず紹介させていただきたいと思います。

1　災害防災　ノアの箱船
― 地球社会の破滅が危惧されるまでになった ―

私が言いたいのは，「災害防災」という観点です。手厳しい災害からレッスンを受けて，似たような加害力が社会に作用したときにダメージをどのようにミニマイズするかということです。私たちの防災の努力というのは，ノアの箱船に喩えるとわかりやすいと思います。神の啓示を受けたノアのように箱船をつくって，死なないようにしようというわけです。箱船をつくるためには，非常に膨大な数のエンジニアが要ります。ヒューマンのリソースィズが要ります。そして，鉄とか，釘とか，木材とか，その他多くの資源が要るということです。しかしながら箱舟づくりの結果，災害に対する脆弱性のRoot　Causesは残されたまま，何も解決されていないという現状が残ります。しか

も，脆弱性はその後も増大し続けている。これまで滅びた文明は数知れずありますが，その背景の一つにレバノンスギの減少があったのです。

最終的には地球社会の破滅が危惧されるまでになった，そういう社会に我々は住んでいる。したがって，戦争をやってむだに資源を浪費している余裕はない。災害を起こして，その復旧・復興に余分な資源を割いている余裕はもう残されていない，時間との競争だというふうに私は思っています。

2 災害は復興と開発のチャンス……か？

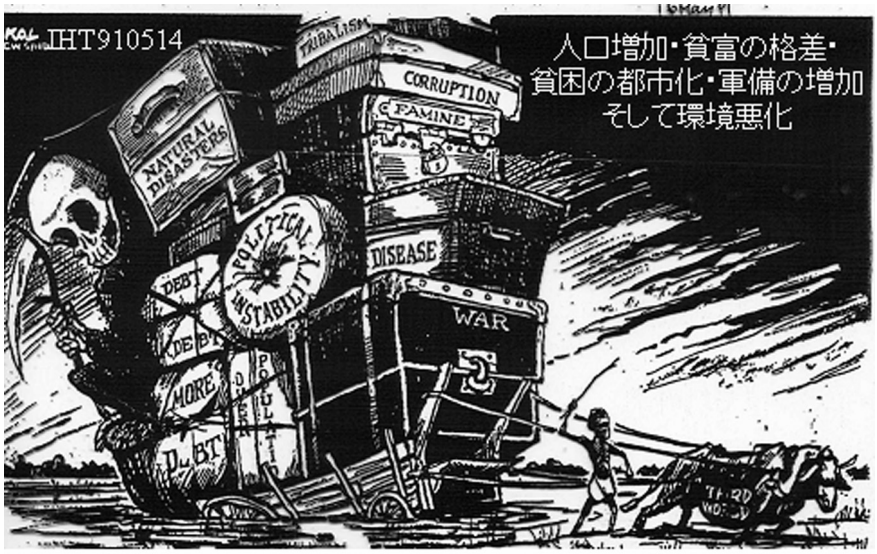
ところで，今から300年ほど前は，「火事とけんかは江戸の花」と言われておりました。火事というのは災害の一つです。災害時には紀伊国屋文左衛門という優秀な企業家が活躍し，そして，それには民衆の支持があった。なぜ民衆が支持して，優秀な企業家が活躍の場を得たかといいますと，火災というのは一つの復興の壮大なチャンスであった。したがって，膨大な復興需要があったということです。それにみんな喜んだ。すなわち家屋の再建には，大工，左官，石工，庭師，金物師等々が喜んだ，ベネフィットを得たということですね。それから，生活の再建には，繊維の専門家，家具屋，調理具，上水，刀剣・武具・調度品等の工芸士も潤った。交通・運輸網が整備された。防災行政もしっかり筋金が入った。そして，そういったことで新たな文化も生まれたということで，豊かな資源に裏づけられて経済の好循環が起きたということです。したがって，災害は一つの大きな経済チャンスだったと言えます。

ところが，現代は「災害は復興と開発のチャンスだ」と言っている場合か！ということです。これは，日本のせっかくの海外援助が，住民の怠慢のせいで，ひっくり返ったまま復旧もされないということです。決して災害は復興・開発のチャンスではないという現実です。結局，地元住民の能力を超えるものを援助で差し上げても意味はないという証拠です。

これ（図１）は，インターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙に載ったイラストレーションですけれども，途上国の現実を物語って余りあります。自然災害がずっしりとのしかかって途上国の発展を妨げている。それに加えて，戦争がある，病気がある，飢えがある，汚職がある，長期債務がある等々です。

開発途上国の現実を見てみますと，これはおしなべてインドネシアも，フィリピンも，どこもみんな一緒ですけれども，被害額が復旧投資に比べて圧倒的に多い。フィリピンの場合は，被害額は復旧投資の約４倍です。そうすると，そのフィリピンの国は滅びてしかるべき国なんですが，なぜ滅びないか。それはせっせと援助しているからです。

災害の原因ですけれども，こういう巨木（写真１）を切ろうと思ったら，斧やのこぎ



—We are running a race against time.

戦争なんかやってる場合か？ — 戦争は外交の失敗（福田康夫）

図１

りでは切れない。重機械がないと切れない。重機械でも取りきれない根がこうして下ってきて大災害を引き起こす。これは不正・不法の動かぬ証拠じゃなくして，不正・不法が動いた証拠だと言えます。

これも日本が援助した巨大土木工事です（写真２）。川が図面の向かって右のほうに流れて下の集落に被害を与えるのを防ぐために長大な堤防をつくっているわけですけれども，折からの建設ブームのせいで，砂利需要にこたえるために川底を掘った。そうすると，いつこの巨大堤防がトップリングを起こしても不思議でないような状況になった。ここでは，被援助国と援助国の共同不正が目の当たりに見えると思います。

脆弱な人たちに防災支援はほとんど届かない，全く届かないと言えます。

写真１　不正・不法の動いた証拠

写真２　日本が援助した巨大土木工事

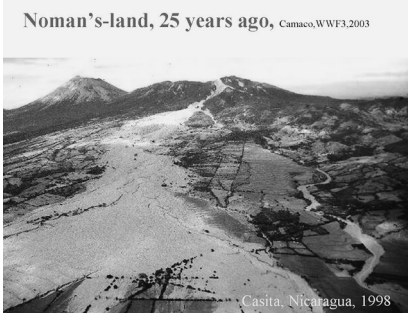


写真３　Casita, Nicaragua, 1998

写真４　Asahi Shinbun, 1999　目撃者III－15

写真５　きれいな花束

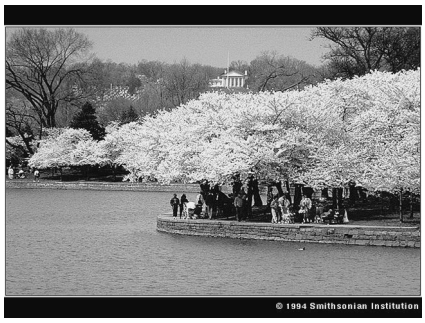


写真６　ワシントンのポトマック川の桜

これはハリケーン「ミッチ」にやられたニカラグアのケースです（写真３）。日本だったら，こういうケースに十分対応できると思います。

加害力に対して脆弱な人たちに防災支援の手は届いていない。

日本も今から60年前はそうだった。毎日が災害で，災害防災とか文化とか言っている場合じゃなかった。これは銀座の1945年の光景です（写真４）。

そして，私の結論は，ほとんどの途上国で防災ができない理由として，やる気があっても，防災では飯が食えない。日本の防災力が世界的に見て１級の能力がある理由は，私ども防災関連の者が，防災を職務として十分に食っていける，賄賂をとらなくても家庭が維持できる，子どもの教育ができる，老後の心配がまずほとんどないという状態になっている，いわゆる飯が食えるということで防災ができる。ところが，途上国では，防災では飯が食えない。その理由として，１番目は，余剰がない―資源があっても余剰にならない。２番目は，余剰があっても防災に回らない―戦争が多い。３番目は，国家が国民国家になっていない。４番目は，したがって，汚職等の不正に歯どめがきかない。５番目は，援助依存症の慢性化―おんぶに抱っこ症候群が既に蔓延している。６番目は，援助疲れ症候群と援助のビジネス化ないしは趣味化。そういうことで，「防災」「防災」と声高に言っても，防災なんかできるわけがないというのが私の結論です。

ところで，「必ずしもそうではない，援助の仕方によっては可能性もある」というの

が以下です。援助の仕方に二通りある。すなわち，この写真にあるように（写真５），きれいな花束を贈呈する形の援助を私どもはこれまでやってきて，喜ぶ顔が見たい，喜んでいるから成功だったといったようなことを言ってきたわけですけれども，それは間違いである。つまり，根のない花束，切り花の束をボンとあげるのじゃなくして，いい土の中に根がある苗を植えて，そして，それを差し上げて，一緒にケアする，とことんケアする。これはワシントンのポトマック川の桜ですけれども（写真６），こうなると，その援助とその成果は永遠である，こういう援助をしなくちゃいけないと思うわけです。

3　きょうの研究会の成果
今後何をするべきか？――行動と発言

それで，きょうの研究成果の私の感じたことですけれども，今後何をするべきか。行動し発言するべきだろうと思うんですけれども，きょうのプレゼンテーションを拝聴してわかったことは，１番目は，対象被災地域の混乱，特に政府と社会の当事者能力の大幅な不足がまず挙げられると思います。

２番目は，援助・協力の無調整です。調整がほとんど行われていない。これはスリランカの場合とインドネシアのアチェの場合を比べると，かなりの差があって，アチェの場合は，お聞きしていると，このコーディネーションが非常にうまくいっているというふうに聞こえましたけれども，これもセクターによるのだと私は思っています。全く無原則・無調整で行われているセクターがあるはずだと思います。

それで，実は日本も絡む国際社会の中で，「UNDRO」というのが1970年に設立されて，防災援助の調整を国際的にやって成功した例があります。したがって，そういう国際社会，日本の外交姿勢によってはこれを変えていくことも可能だと思います。

３番目は，戦争の影響の大きさがあって，平和構築の努力がやっぱり必要だということです。

４番目は，インドの復興住宅の都市計画で，階層が絡む焼け太り症候群の問題がある。それから，階層分化のポジティブサイドも指摘されましたけれども，今後の懸念もある。

５番目は，復旧・復興速度の偏り・不平等があります。これはNGOに委託することによって解決されるわけでもない。

６番目は，生命・生活の危機をさておいて文化財にフォーカスすることの問題です。

７番目は，その後のアチェの場合にも若干関連しますけれども，いわゆる「アチェらしさ」というものに私は非常に大きな疑問を持ちます。確かに選択の一つではあるだろうけれども，それは豊かな資源を持つがゆえの社会の余裕だろうかと思ったり，そんなこと言っている場合か！と思ったりします。なぜそう思うかというと，そんなことを

言っていて本当に脆弱性は削減できるのか，Classquakeは補償できるのか，災害難民は出ないのか，アチェ紛争の再発の遠因が今から準備されているのではなかろうかという懸念が抜け切らないからです。やっぱり甘いと思います。

8番目は，アチェの復興は，阪神・淡路大震災のケースに比べて，Phaseの混乱はあるが，決して遅くない。これは牧先生と議論しました。

9番目は，住宅供給におけるスリランカとアチェの違いが際立ったように思いました。アチェの場合は計画の自立性があり，コーディネーションのレベルもかなり高い。スリランカはそうではない。そこにどういう違いがあって，その違いにどういう力学が働くのか。

それから，10番目ですが，津波がアチェの社会に与えた刻印の残酷さ，これが私は気になります。そして，アチェの平和が長続きすることを祈り，期待し，また再発しないように援助の一端に加わりたいと思います。

それから最後に重要なことですが，それでどうするかということです。

1番目に，国際協調のために，徹底的にそのおんぶに抱っこを覚悟した援助をしなくてはならない。

2番目に，そうはいうものの，自助と互助をベースにしたコミュニティ・ベースト・アプローチ（CBA），これも非常に重要である。

3番目に，兵士の帰還の早期促進。帰還兵士の生計安定。

4番目に，事実と予兆に関する伝承・教育の支援の徹底です。

5番目に，国際村社会のおつき合いとして緊急人道支援，これはやり続けていかないといかんだろう。

6番目に，豊かな人々同士の研究協力，これも研究者の責任だろう。

以上です。